



阪谷芳郎

—近代財政確立に寄与した「法沢同族」—

白梅学園大学子ども学部教授 山路憲夫

白梅学園の前身、東京家庭学園の設立母体となった財団法人「社会教育協会」には、設立当初から財界、官僚、学界、言論界を代表する人々が集った。

理事長の穂積重遠とともにそのトップにいたのが「社会教育協会」の初代会長・阪谷芳郎である。

阪谷芳郎は備中後月郡江原村（現在の岡山県）出身、1884年（明治17）東京帝国大学文学部政治学理財学科を卒業、大蔵省に入った。順調に昇進、大蔵省主計局長を経て、大蔵次官となった。さらに1906年（明治39）1月成

立した第一次西園寺内閣で大蔵大臣まで上りつめた。

それまでの大蔵大臣のほとんどが、明治維新をくぐりぬけた維新の功臣だったのに対し、東大で政治、経済学を学んで大蔵省入りした生え抜きの「学士官僚」として初めての蔵相となった。二年余で蔵相を辞任した後も、東京市長、貴族院議員となり、数多くの審議会、協会、大学にも関係、論客としても活躍した。

いわば「位人臣」を極めた人物が、なぜ一財団法人の社会教育協会に初代会長として就任したのか。

それを明らかにするために、社会教育協会が設立された経緯を振り返りたい。

社会教育協会は白梅学園の創設者である小松謙助が中心となり、1925年(大正14)11月に設立された。当時、関東大震災後まだ2年、その傷跡もいえず、世情騒然としていた。貧困の中で、義務教育もろくに受けられない人たちがも少なからずいた。学校教育からはみ出た人々をどう教育すべきか。

小松謙助が東京日々新聞(現在の毎日新聞)学芸課長を退職した後、社会教育協会の設立にあたったのは、ジャーナリストとして磨いたアンテナで、学校教育だけではない社会教育の重要性を洞察したからであろう。

社会教育協会は設立にあたって「義務教育さえ完全に終了せぬものが、今日といえどもなお多数残存しているのです。あります」「わが国家社会の将来は今日の青少年諸子の双肩にかかっている」と社会教育の重要性を説いた上で「社会教育の完成は決して政府当局の手にのみまっすべきものでなく、いやしくも国家社会の前途を念とする者の等しく等しく寄与せねばならぬ問題であると思います。社会教育協会は、かかる当面の要求に促されて設立された」とその趣旨を世間に訴えた。

ちょうどその頃、学校教育とは別に公民教育、社会教育

の必要性を受け止め、文部省が社会教育局を設置したのも、そうした動きの現われだった。

小松謙助は、新聞記者時代に培った人脈をフルに生かして、各界に参加を呼びかけた。その結果、新進気鋭のリベラルな法律家たちが集っていた中央法律協会の片山哲、星島二郎、牧野英一、さらに緒方竹虎(東京朝日新聞編集局長)や城戸元亮(大阪毎日新聞主幹)らの新聞人、財界からは正田貞一郎(日清製粉社長)、米山梅吉(三井信託社長)の各氏(肩書はいずれも当時)、文部官僚、政治家も役員に名を連ねた。トップの会長には阪谷芳郎、理事長には法学者で東大教授の穂積重遠が就任した。

財団法人として文部省の認可は当然必要だった。各界を代表するメンバーを役員に据えたのは、その認可を得やすくしたいという目的もあつただろうが、役員に顔を揃えたメンバーのほとんどは名前を貸すだけの役員ではなく、小松らの社会教育の推進という趣旨に心から賛同した人たちだった。

さまざまな形で助力、寄付にも協力をした人々もいた。その中心となつたのが理事長・穂積重遠だった。設立に必要な財団の基金三千円は穂積自身から恩借金として借り受けたものだった。

その穂積と姻戚関係にあつたのが阪谷芳郎だった。とも

に実業家として知られた渋沢栄一の一族だった。

渋沢栄一は大蔵省を若くして退官後、第一国立銀行を経営するなど数々の企業を設立、「日本資本主義の父」と呼ばれた。渋沢は長女歌子に法学者の穂積陳重(穂積重遠の父)を、次女の琴子に大蔵省に入ったばかりの阪谷芳郎を選び、嫁がせた。穂積も阪谷も将来を嘱望されていたとはいえず、いずれも勤め始めたばかりの若輩だった。穂積は、後の東大教授で日本近代法の父と呼ばれるようになる。阪谷も大蔵大臣になると誰が予想しただろうか。

阪谷の場合、幕末期に備中の儒学者だった父が、渋沢と交流があったという縁はあったが、渋沢の人を見る目の確かさを物語るものであろう。

二人を婿に迎えた後の1891年(明治24)、渋沢は「渋沢同族会」を設立した。

渋沢が関わり、所有する会社の株を管理する持株会社として「渋沢同族会」を位置づけ、渋沢同族の所有株が生む利益の11分の5を渋沢宗家に、残り11分の6を穂積家、阪谷家、そして後妻との間に生まれた三男一女に平等に分け与えた。渋沢の複雑な家族内の争いが起きないように、そして娘とその婿たちも同族として処遇した。

戦後「渋沢同族」は三井、三菱、住友、安田と並んで五大財閥の一つとして数えられ、財閥解体の対象となり解散し

たが、それまでは「同族」として固い結びつきがあった。

社会教育協会の初代会長に坂谷が就任したいきさつは明確ではないが、「渋沢同族」のつながりから、社会教育協会の理事長として設立当初から尽力していた穂積重遠が関わったのは想像に難くない。

その阪谷とはどんな人物だったのか。

阪谷の経歴をくわしく振り返ってみよう。

阪谷が学んだ東京帝国大学文学部政治学理財学科は、当時のカリキュラムを見ると「日本財政論」がほぼ半分を占めていた。財政に関する専門的、実務的知識をここで学び、首席で卒業した。阪谷が入省する頃から、大蔵省は近代国家の中央財政機関としての体制整備を急速に進めた。阪谷は会計制度、貨幣制度の調査立案にあたるなど金融、財政政策の確立に奔走した。

そんな最中、日清戦争が起きた。阪谷は1897年(明治30)主計局長となり、日清戦争及び戦後の財政処理の実質的責任者として、その重責をこなした。

この時期、日本は銀本位制から金本位制に切り替えた。世界の主要国は金本位制に移行していた。金本位制に反対する声も出たが、金本位制というグローバル・スタンダードに移行すれば、日本にとって外債の調達もやりやすくなるというのが、阪谷ら大蔵官僚の主張だった。

日本の資本主義が「人前」の仲間入りした後の1901年(明治34)、日露戦争が勃発、阪谷はその直前に次官に就任した。

日清戦争に比べ、はるかに巨額の戦費を要した。金本位制は、その戦費調達に威力を発揮した。阪谷はまたも、戦争遂行、戦後の財政処理の中心となった。そして1906年(明治39)大蔵大臣に就任した。44歳の若さだった。

薩長中心の藩閥政治が色濃く残る時代に、抜擢されたのは、財政金融の専門的な知識を持ち、しかも日清、日露戦争での財政運営を乗り切った手腕をかわれたのだろう。

しかし、日露戦争はなんとか乗り切ったとはいえ、その戦後処理で予算編成が難航した。緊縮政策をとるべきか、戦後経営の拡大を目指す積極政策をとるか。政治家、軍部、財界の思惑もからんで、複雑な対立の中に阪谷は巻き込まれた。緊縮財政の立場を採る阪谷は追加予算を拒否、その調整がつかず政府部内での対立の調整がつかず、就任から2年で辞任に追い込まれた。

「若輩の『事務』大臣に過ぎなかった阪谷の能力でもともと調整し得ないほどの高次の政治問題だった」(遠藤湘吉ら共著「日本の大蔵大臣」日本評論社)と後に評された。日露戦争後、軍部も台頭、さまざまな矛盾も顕在化する中で、官僚出身の阪谷の限界はあった。辞任は避けられなか

ったのだろう。

大蔵大臣を辞任後阪谷は、1912年(明治45)から、尾崎行雄の後を受けて、第三代東京市長となり、4年近くをつとめた。1917年(大正6)、貴族院議員となると共に、国会の内外で論客として活躍、専修大学総長や渋沢系企業の役員、各種社会、文化団体の会長なども引き受け「百会長」も呼ばれた。多くが「渋沢同族会」の一員として、岳父・渋沢栄一の社会活動を継承したものが多かった。

渋沢栄一はさまざまな産業分野の近代企業を興しただけでなく、非営利の社会事業に力を尽くしたことも知られている。東京都養育院、結核予防会、盲人福祉協会などを設立、社会福祉や教育事業にも関わった。事業は道徳とも一致しなければならぬという信念を持ち続けた稀有な財界人だった。阪谷はその事業の一部を受け継いだだけでなく、さまざまな社会活動に積極的に関わった渋沢の思想の影響が色濃くあったように思われる。

それは、雑誌「共存」第二巻第三号(1922年)大正11年)3月に掲載された阪谷の一文「国民の品位を養成せよ」からもうかがえる。

阪谷は「国民思想の統一」の必要性を説いた上で、当時盛んになりつつあった労働運動について「わが国民思想が動揺し、労働運動が悪化しているとは考えない」とむしろ肯



Celebration of the 10th anniversary of the foundation of the Social Education Society.

時事新報

創立滿十年の社會教育協會

個人自覺の社會的自覺を目標とし、我が國社會教育運動の核心たることを期し、努力精進し來つた社會教育協會は幾多の政界を収め盛大に創立十周年記念會を開催するに至つた。寫眞は記念會に於ける理事長穂積博士の挨拶。

昭和十一年十一月十六日
東京千代田区神田
THE ZEI-SHIN-SHO

定的にとらえつつ、労働運動にも国民自身にも「品位」の重要性を次のように訴えた。

「国民的品性の養成については、主として教育の力に待たねばならぬが、独り教育のみ一任しては、決して完全なる結果を期待することはできない。人は何人にかかわらず『我なくんば国家の運命をいかんせん』という大抱負、大理想、大識見がなくてはならぬ」。

当時、阪谷は東京市長を辞任後様々な役職を兼ねてはいたが、貴族院議員として比較的自由にモノを言える立場にいた。当時としては労働運動にも理解を示し、リベラルな考えの一端が見える。社会教育協会会長に就任したのはその3年後で、社会教育協会に関わる前から、社会教育に多大な関心を持っていたことも、この一文から見とれる。

阪谷芳郎の孫、阪谷芳信氏（白梅学園監事）によると、社会教育協会は阪谷が就いた数多くの役職の一つではあったが、数多い役職の中でも、晩年は最も重きを置いた役職の一つとして考えていた。

財団法人・社会教育協会の十周年記念式典で病を押して出席、挨拶を述べた。

十周年記念式典は1935年11月16日、東京千代田区神田の学士会館で開かれた。その模様を社会教育協会（現在の本部は東京都日野市）発行の「社会教育新報」（1935

年12月1日付け)が伝えている。

一面に「記念会の盛観」という見出しで掲載された5枚の写真のうち一枚に、阪谷芳郎会長が挨拶する写真がある。写真説明に「病を押して参列された会長阪谷男爵はいと元気に懇ろな謝辞を述べられた」とある。

阪谷はその5年前に心臓病の持病を抱えるようになり、遠出はもちろん外出も控えるようになっていた。出席したのは、本協会にかける阪谷の思いがあったからだろう。

式典には256人の関係者が出席、来賓には岡田啓首相をはじめ当時の文部、内務、陸軍大臣ら政府のトップも席に連ねた。

記事は「歡びと希望に満ちた本会創立十周年、折り紙つけられた本会の事業成績」との見出しで、その式典の模様をくわしく報じた。

設立から10年で、社会教育協会は社会人を対象に「社会教育パンフレット」や「民衆の友」「社会教育新報」などの活発な出版事業のほか講演や講座の幅広い活動を通じて、阪谷会長が目指した協会の活動が軌道に乗った。それが社会に認知され、当時の政府もバックアップする組織にまでなったことが、その記事からも伝わってくる。

阪谷は、その6年後、太平洋戦争開戦直前の1941年(昭和16)11月14日、78歳でこの世を去った。

阪谷の生きた明治、大正、そして昭和の初期は、日本資本主義の発展期でもあったと同時に「戦争の世紀」でもあった。激動の時代を生き抜いた阪谷の生涯を振り返ると決して平坦な人生ではなかった。その中であつて、阪谷は大蔵省に入省以来晩年まで、60年近く日記を書き続けた。学生時代から誰もが認める無類の勉強家であり、自らを省みようとする姿勢を持ち続けたことを示している。穏やかな人柄で、争いを好まず、会議では控え目だった反面、社交家でもあり、頼まれれば役職を引き受け、巧みな話術で「縦横自在に知識を振いて、かの人は実に博識なりと人に感服せしめ、おのれを尊敬せしむることを務むべし」という処世方針を忘れなかった(「阪谷芳郎伝」)。

阪谷と白梅とのつながりは阪谷の死で終わらなかつた。白梅学園の前身、東京家庭学園が阪谷の死後の翌年に設立、戦争が激しくなつた1944年政府の非常措置により、東京家庭学園は一時休止となり、勤労女子青年錬成所となつた。1945年5月25日の東京大空襲により、旧小石川区指ヶ谷町の校舎が一夜にして消失、同じ敷地にあつた社会教育協会とともに焼け出された。

それを受け入れてくれた先が、阪谷芳郎が住んでいた世田谷区の旧阪谷邸だった。当時は洪沢栄一の顕彰財団「竜門社」が管理していたが、阪谷と社会教育協会とのつなが

りから、無償貸与されたのだろう。敗戦後の9月、東京家庭学園を再開した際、旧阪谷邸から小石川丸山町の修道院に移転した。

白梅と阪谷家、「渋沢同族」とのつながりはそれだけでは
ない。

阪谷芳郎の次男にあたる阪谷俊作氏(故人)は、名古屋市立図書館長などを経て、1957年白梅学園短大保育科専任教授(国文学、書誌学)となり、18年間勤務、白梅学園短大初代の名誉教授の称号も受けた。

渋沢栄一の顕彰財団である「渋沢青淵記念財団竜門社」は設立当初から現在に至るまで、雑誌「青淵」を発行し続けているが、昭和二十年代の一時期、「青淵」の編集及び発行を「社会教育協会」が担当していた。

阪谷芳郎、阪谷が属した「渋沢同族」、そのルーツとなった渋沢栄一の思想と白梅学園の母体となった社会教育協会とのつながりは深く、長い歴史がある。それがさまざまな形で現在の白梅学園に受け継がれ、寄与してきたのはまぎれもない。

この一文をまとめるにあたり、社会教育協会から「社会教育新報」の資料提供を頂いた。阪谷芳郎の孫にあたる阪谷芳信氏(白梅学園監事)も取材、資料提供に快く協力してください。心からお礼申し上げます。(敬称略)

【参考文献】

- 故阪谷子爵記念事業会編集兼発行「阪谷芳郎伝」1951年
阪谷芳直「三代の系譜」みすず書房、1979年
佐野眞一「渋沢家三代」文藝春秋、1998年
佐野眞一「旅する巨人」文藝春秋、1996年
白梅学園短期大学「白梅学園短期大学創立創立二十五周年記念誌」1982年
白梅学園「樋口愛子先生追悼録」1977年
田中未来「阪谷俊作先生の想い出」(「白梅学園短期大学紀要第13号」所収)1977年
大谷まこと「シリーズ福祉に生きる11渋沢栄一」大空社、1998年
阪谷芳郎「国民の品位を養成せよ」雑誌「共存」第三号所収、1922年
渋沢青淵記念財団竜門社発行「青淵」447号(竜門社創立百周年記念特集)1981年
社会教育協会「社会教育新報」1935年